

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 平成30年度修了生アンケート結果（修士9名、博士3名）※  
（平成31年3月実施）

大問	小問	平均値※			評価の具体的内容	改善の方法
		H28	H29	H30		
1 学修について	①新たな知識や考え方を提供したか。	4.9	4.9	4.9	基本的な研究のあり方、学問として現場の出来事を表現する手法が学べた。 研究方法や分析方法など全く知らなかった。他の職種の方の学び続ける姿勢に学ぶことが多かった。 根気よく学び続ける必要性を感じた。修了後も学んでいきたい。	教育・心理・福祉と援助に関わる3つの分野から、各自の研究テーマに適した研究方法や調査方法が編み出せるよう指導に努めます。 また、修了されたのちも、本研究科主催の学術講演会・シンポジウム・臨床教育研究懇談会などの案内をはじめ、ゼミOB・OGの勉強会や修了生の自主的な研究活動を支援していきます。また、修了生のメーリングリストを作成し、研究科が行う講演会や研究会等の情報を頻繁にお届けするよう取り組んでいます。
	②専門分野の問題や研究課題の解決に活用できたか。	4.7	4.8	4.7	論文を沢山読んだことで、最近の専門分野の動向が理解できた。 多くの現場での話を聞くことができたことで、自分の臨床現場の問題に照らし合わせ考えることができた。 自分のこれまでの臨床・実践を、先行研究に位置づけ、対象化して考えることができた。	講義だけでなく、関連論文を読んだ後の討論や、それぞれの専門分野の課題とその考察を受講者間で交流するなど、授業方法の改善に取り組んでいます。
	③対人援助職の広範な取り組みに興味や関心が広がったか。	4.8	4.8	4.7	日常生活では対話もすることがない職種の人から専門的な話を聞く等、様々な分野の人と交わることができた。	全体特研や中間発表会などの研究発表の場だけでなく、ゼミの交流や臨床教育研究懇談会での研究交流も盛んに行いたいと考えています。
	④アンケートや聴きとり、資料収集などの方法やその読み解き、分析の方法、さらにプレゼンテーションの力量はついたか。	3.8	4.2			
	④-(1) 資料収集ができるようになったか。			4.3	基本的な研究の進め方と、それぞれの段階の意味、研究の世界の作法がどのようなものなのか、大きな部分がよく分かった。	資料収集やその分析・検討の方法は、研究目的や対象、考察の進め方によって異なってきます。調査法や先行研究を参考にしながら、またそれにしぼられることなく、ハンドメイドの方法を創出できるように、時間をかけて援助します。 量的な研究手法を避ける傾向が見られますが、研究論文を読むときでも基礎的な知識は必要となりますので、できるだけ受講してもらおう取り組んでまいります。
	④-(2) プレゼンテーションの力量はついたか。			3.8	研究分野に必要な言葉や概念が増えた。	
	④-(3) 質的研究法が理解できたか。			3.9	インタビューの方法や研究倫理、具体的な配慮のあり方がわかった。	
	④-(4) 量的研究法が理解できたか。			3.4		
	④-(5) 論文を書くためのスキルは獲得できたか。			4.1	どのようにすれば他者に伝わる文章になるか、ゼミで何度も読み合って書き直した。	
	⑤現場で生じる様々な課題や問題についての新たな視点や確かな解決案が考えられたか。	4.4	4.9	4.3	解決しなくてもいい。解決していない状況を描き、討論し、学ぶということが大切だと知った。 現場で活かせる研究という視点を大事にした。	課題が解決できるということは大事ですが、課題がまずどのようなものなのかを明らかにすることを研究の中心にすえ、その作業を通して明らかになった知見を、応用できる条件や範囲を示して提言できる、「臨床」研究の基本が踏まえらるるよう指導します。
2 授業や研究指導について	①充実した内容だったか。改善すべき点は何か。	4.6	4.9	4.9	様々な分野の先生や学友が、異なる立場や価値観で意見を述べ、交流できたのが良かった。 一方向での学びではなく、様々な分野の方とのディスカッションが知識や視野、考え方を広げてくれた。	ゼミでの教員・院生の討論が、研究内容の質を高め、研究方法を精緻なものにします。特に人を対象とする調査では、高い研究倫理が求められ、これを具現化できるように支援します。
	②研究に対する指導教員の指導やゼミの院生の支援は、充実していたか。改善すべき点は何か。	4.7	5.0	4.9	学識だけでなく、人間性も見えてよかった。 いつもゼミに来ると元気をもらえた。また、私のペースに合わせて指導していただきとても勉強になった。 思考が混乱している時、緊張をほぐしながら、とても丁寧に指導をしていただいた。	院生のみなさんの課題や研究テーマは、教員の専門的な研究領域と異なる場合がほとんどです。教員も院生の研究内容に接し、その分野の学習や研究をともに探究する姿勢で臨めるように努めます。
3 院生生活について	①大学院での生活(授業や研究の環境も含め)は、充実していたか。改善すべき点は何か。	4.4	4.8	4.8	やはり仲間は頼りになった。 授業時間に間に合わないのが道中焦る。あと10分でも遅くしてほしい。 仕事と勉学の両立に、職場・家庭でさまざまな配慮していただいた。	18時10分からの夜間の授業は、職場からの通学時間が相当長時間の方もおられ、大変なことは察せられます。また、21時の授業終了を遅らせれば、帰宅時間が遅れ、大変難しい課題です。授業の取り方などについて個別に相談させていただきます。

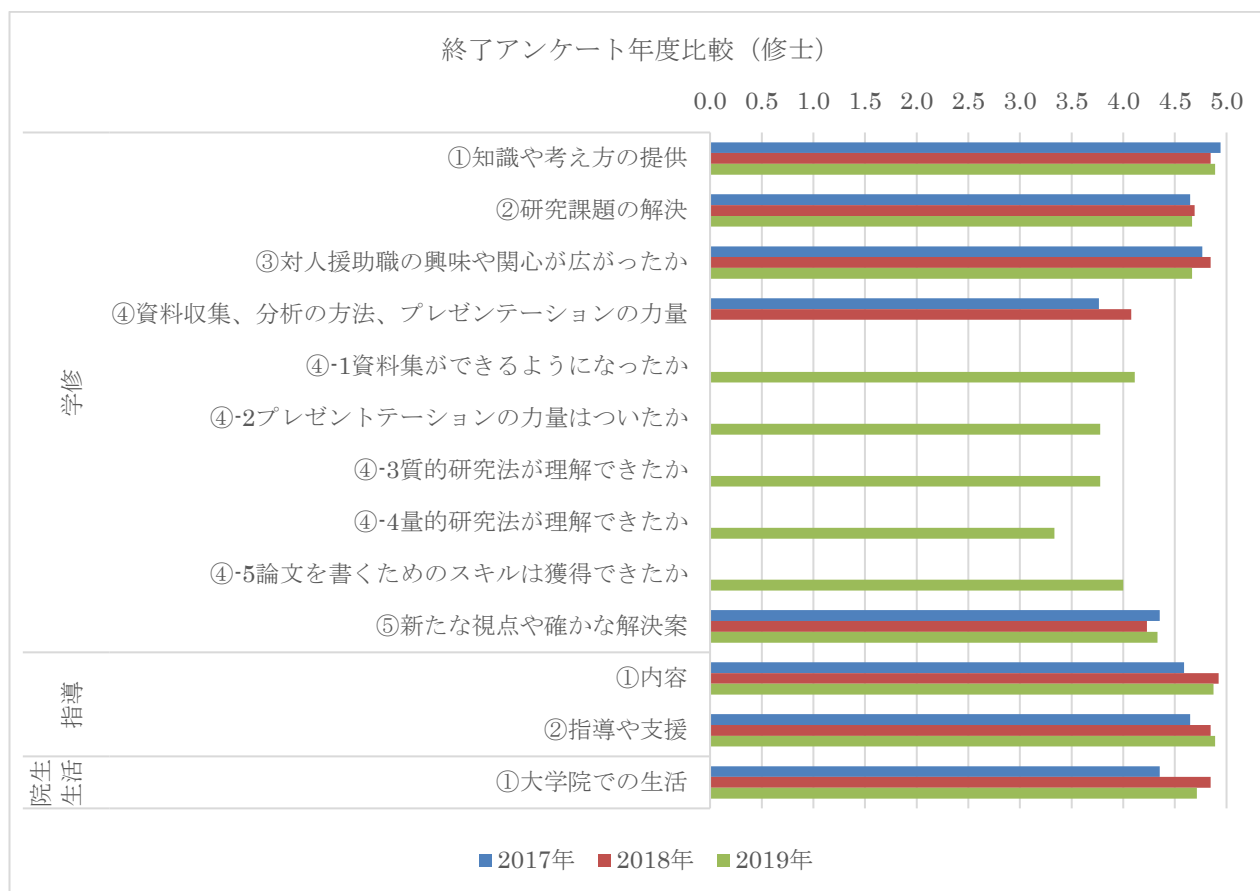
※ 1～5の5段階評価で、5が最も高い評価

大学院生活についての自由記述（一部抜粋）

- ・ 様々な分野の方と知りあえたことや、教員の方からの色々な意見をいただけたことは本当に有意義で

した。

- ・ 全体特研や中間発表会など、全員の前で発表するのは緊張したが、いい経験だった。
- ・ 自分の力を出し切ることができた。
- ・ 院生交流会で、学年全員でダンスを踊ったこと。



### 学生評価に対する研究科としてのコメント

研究科の自己点検・評価の一環として修了生へのアンケートを **2015** 年より始め、今年で **4** 回目の実施となりました。自由記述を含むこのアンケートは、研究科の教育・研究指導のあり方を改善していくためのものであり、この結果を研究科教員が共有し、改善に努めております。

アンケート自体も皆さんの声を反映できるよう、少しずつではありますが詳細なものにしております。今回のアンケートでは、従来の「④資料収集、分析の方法、プレゼンテーション」という質問でしたが、複数の内容を含み、評価が難しいということで、④-1～④-5 の 5 つの技能に分割をした質問といたしました。

全体的な評価としては、5 段階評価で概ね 4 以上の評価をいただいておりますが、今回から内容を詳細に分けた上記④の質問では、3 点台の評価もありました。これまで大雑把で曖昧な評価になっていたものがクリアになったという意味で、よかったのではないかと思います。これによると④-2 プレゼンテーション、④-3 質的研究手法、④-4 量的研究手法、の理解に関する評価が 3 点台となっています。プレゼンテーション力につきましては、修士全体特研や中間発表、博士後期課程全体特研への参加、発表を通じて、自らの経験を深めていただくようにしています。各ゼミにおいてもこれを念頭に置いた指導を行っていくよう努めます。質的研究手法、量的研究手法については、ゼミ指導の他、それぞれ対応する科目を置いていますが、特論は選択科目であり、授業を取っていない院生もいることから評価が低くなっているとも考えられます。研究手法を理解し、身につけることは難しく、時間がかかります。研究科としては、できるだけ多くの院生が授業を取れるようにするとともに、担当教員を話し合いながら授業内容についての見直しも検討をしたいと思っております。

アンケートへのご協力をありがとうございました。これら修了生からの貴重な意見を参考として、今後の研究科の教育・研究指導をさらに向上させてまいります。また、アンケートに限らず、要望や意見を提示していただける機会を作っていくよう、検討いたします。

臨床教育学研究科 自己評価委員会  
(2019 年 4 月)